

(5枚プロット)

梅雨があけたら(第2稿)

作 山口 ひろたか

登場人物

松田広太(10)

小学校5年

野田武史(10)

広太の同級生

松田芳郎(65)

広太の祖父

広瀬洋一(10)

広太の親父

松田華(8)

広太の妹

広太の母

山下先生

アツシ

P1} P6 生徒作品

P7} 塾長の批評

P8} 塾長の添削

P9} 塾長のアドバイス

梅雨の時期、岡山県のとある田舎町。夏休みを控えたクラスでは休みの最中に行われる『地蔵祭』の話題で持ち切り。小さな御輿を担ぎ、組に分かれて競争する地蔵祭は、地元の子供たちの大きな楽しみ。担任の山下先生(30)から毎年恒例の色ごとに分かれたハッピを手渡され浮かれる子供たち。その中で一人、机に突っ伏したままの松田広太(10)。広太は二ヶ月前に父を亡くし、京都から母の実家に引越してきた。急な転入だったのでハッピの余りがない。山下が声をかけようとした時クラスの野田武史(10)が広太に近寄る。しかしクラスに馴染むことができず、話しかけられるのが疎ましい広太は、野田を無視し教室を抜け出す。

家に帰った広太は、早速パソコンに向かう。京都の親友・広瀬洋一(10)といつものメールでやり取りだ。玄関から妹の華(8)と祖父の芳郎(65)の声が聞こえる。広瀬との秘密の時間を邪魔されたくない広太は、静かに

電源を切る。

広太の家では、昼間働きに出ている母に代わり、芳郎が子供たちの面倒を見ている。夏休み入ったある日、山下が芳郎を学校に呼び出す。「広太がクラスに馴染んでいない」山下は芳郎にそう告げると、なんとか地蔵祭に参加して同級生と打ち解けられないかと提案する。

夏休みに入って、華は地蔵祭の練習のために毎日友達を家に呼んでくる。芳郎が作っていたハッピを着て楽しそうに練習する華。広太は、なんの抵抗もなくここに馴染んだ華のことが憎い。一人部屋に閉じこもる広太は、広瀬に「妹がうざい」とメールを送る。広瀬も同じような返事を返してくる。広太は広瀬が同じ思いでいることが嬉しい。

そんなある日、広太は地蔵祭の練習帰りのクラスメイトと遭遇する。思わず身を隠す広太。その中には野田の姿もあり、広太に気がついた野田は友人を先に帰らせて一緒に遊ぼ

うと誘うのだが、広太はやはり無視。家に戻ると広瀬から「夏休みはどうすんの？」というメールが届いている。友達がいらないと思われたくない広太は「クラスメイトと旅行に行く」などと嘘をついてしまう。

連日やってくる華の友達で広太の家は賑やかだ。毎日一人、部屋にいる広太は楽しそうにする華が鬱陶しくてたまらない。ある日、遂に我慢の限界から、広太は家に誰もいないときを見計らって華のハッピを捨ててしまう。ハッピがなくなっていることに気付き華は大泣き。しかし芳郎がまた作ってやるとなくさめる。なんとなくバツの悪い広太は、まず自分の世界に没頭していき、広瀬への嘘のメールも次第にエスカレートしていく。

そんなある日、広太の家に野田がやってくる。居留守を決め込んでいた広太だったが、芳郎は勝手に野田を部屋に入れる。仕方なく野田と遊ぶはめになった広太だったが、野田は事あることに広太を褒める。最新のパソコン

ンを使いこなす広太に、遂には野田が弟子にしてくれとまで言い出す。最初は気乗りしない広太だったが、野田に乗せられ少し嬉しい。帰り際、野田は広太を地蔵祭に誘う。しかし、やはり広太は煮え切らないでいる。

それから野田は、度々広太の家に遊びにくるようになる。ある日芳郎は広太と華に手作りのハッピを渡す。それを見た野田は一緒に地蔵祭に出られると喜ぶが、思わず広太は馴れ馴れしくするなと罵声を浴びせてしまう。反射的に芳郎は広太の頬を打つ！ ショックを受けた広太は、家を飛び出してしまふ。

広瀬に連絡し、京都にやってきた広太。広瀬の連絡で、久しぶりにたくさんの同級生が集まる。しかし、そこには見慣れない顔が――「紹介するよ。アツシ」、広瀬から紹介された広太。アツシは広太が転校して、入れ違いのようにやって来た同級生らしい。すでに仲間たちに溶け込んでいるアツシを見て、広太はアツシに嫉妬する。

広瀬の家で、広太は反発心からアツシのことを「いけ好かない奴だ」と罵る。しかし広瀬は、「あいつなりに頑張っている」とアツシをかばう。親友の意外な言葉に戸惑う広太。やがて広瀬の親から連絡を受けた芳郎が迎えにやってきた。帰り際、広瀬から今度はお前も友達と来いよと言われ、広太は複雑な気持ちになる。

岡山への帰りの電車。芳郎は、野田も自分と同じく、早くに父を亡くしたのだと、優しく広太に聞かせる。広太は今まで野田にたくさん当たってきたことを後悔し、芳郎の胸元で泣きじゃくる。

地藏祭をひかえ活気づく子供たち。広太の家に野田がやってくる。野田が強引に広太を引っ張っていこうとした時、芳郎は広太に作ったハッピを渡そうとする。すると「野田に借りるからいい」広太は芳郎のハッピを置いていく。梅雨が明け、日差しの中を広太と野田が駆けていく(終)

梅雨があけたら 5枚プロット

(第2稿の批評)

相変わらず日記です。「出から核心をつく」とはどういうことか。1行でも早く主人公を「テーマに沿った危機」に陥れたいので、私がイントロ部分を書き直してみるので参考に。

次ページ参照

添削

岡山の田舎町。つゆの小糠雨にけぶる農家。裏手の納屋に駆け込んだ松田広太(10)が、こそと新聞紙の包みを藁の中にかくす。

そこへ祖父の芳郎(65)が帰る。広太の担任の山下先生(30)に呼ばれて学校へ行ってきた。「どうしてクラスの地蔵祭に参加しないんだ。先生困ってたぞ」と叱るが、

「バカバカしい」と広太はふてくされる。

「私のハッピがない！」妹の華(8)が泣いてくる。祖父は広太の仕業かと睨むが、広太は、「うざい」と背をむけ、パソコンに向う。

夏休みに入ったら町の地蔵祭が行われる。小さな御輿を担ぐのが子供たちの大きな楽しみで、広太の同級生を含め、子ども達はハッピを手渡されて今から浮かれている。

広太と華は京都で二ヶ月前に父を亡くし、母と三人で母の実家、一人で暮らす祖父の家
に引っ越して、母は勤めに出ているのだった。

次ページ参照

右のように、『ドラマの核心』から入ること。
映画なら、「見るつもりで金出して入った」
のだから、つまらなくても、今に面白くなる
だろうと期待して、1時間ぐらいは我慢して
くれるかもしれないが、テレビは簡単に裏番
組に切り換えられてしまう。退屈なドラマに
は10分もつきあってくれない。観客の立場で
考えれば理解できると思う。

また、映像なのだから、説明文ではなく、
読んで画面や人物の動きが浮かぶ書きかたが
望ましい。